

第一問 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

地域は「共通の空間」や「座」を失い、場所として機能しなくなっている。地域の下にあった生活空間、消費空間、政治空間などの異質な空間を並置統合できなくなり、地域には各空間の勝手な理屈や作法でモノが配置されるようになる。地域から見れば、モノの配置が無秩序になるのは当然である。また、一つの空間を取り出してみても、空間全部を特定の地域内にとどめおくのが困難になっている。これが「没場所性」の正体である。

たとえば、消費空間は、加工食品から白物家電までどのような商品でも、最前線にあるスーパーの売場のバックヤードで世界に大きく張り出している。また、消費者は、廉価で優れた商品やサービスを簡単に域外から購入する。消費者から見ると、原料やパーツの調達も、加工組み立ても、運搬配送の経路も、地域を大きく逸脱し、消費者がどんなに想像力を駆使しても、モノ、金、人の動きの全貌を捉えることはできない。消費空間に限らず、地域からの諸空間の分離が、地域を混在郷ヘテロトピアに変え、さらに活動空間としての地域を限定的にした。ただ、混在郷は、他ならぬ私たちが日常生活でむしろ悦んで選好した結果でもある。私たちは、混在郷をそこそこ快適に生活している。

ウェブ空間も、また混在郷である。ウェブ空間において、私たちの足場は、アプリケーションが提供してくれるが、それぞれの空間を、場合によって別名、別人格で同時に利用する。アプリケーションは統合されることなく、クライアント側のインターフェイス（OS）上で初めて並置される。このようにウェブ空間は、目的や機能の異なる数多くのアプリケーションが混在する多元的空間である。

地域も、ウェブ空間も混在郷となり、活動空間全体で多元的空間化が進行している。これは、私たちが選好した結果に違いないが、その代償として、私たちは得体の知れなさや、漠然とした不安を感じている。混在郷がもたらしたこの不安の正体は一体何だろうか。

ギデنزの言葉を借りれば、近代社会は「時空間の分断」が可能にした「脱埋め込み」に特徴づけられる。前近代社会では、直接的な相互関係に支配されていたが、近代では、そのようなローカルな文脈から社会関係を時間的、空間的に切り離して（脱埋め込み）、時空間の無限の広がりの中で社会関係の再構築（再埋め込み）が目指される。しかし、そこでは自己の同一性や継続性が担保されにくい状況となり、自己のアイデンティティを巡って大きな混乱が起こる。共時的に見れば、自己はもはや再帰的にしか位置づけられず、通時的に見れば、その時々自己が分断され、連続性への確信が持てない。「再埋め込み」の成れの果てが混在郷なら、この漠然とした不安とは、自己を巡る「存在論的不安」といえるだろう。

混在郷に生きる私たちは、共時的に見ると「共通の名前」や「共通の言葉」を失ってしまう失語症(aphasia)に似て、「共通の空間」を失っている。また、通時的に見れば、帰るべき場所を失って「故郷喪失」に陥っている。時間的にも、空間的にも場所を失った私たちは「失郷症(atopia)」を患う。atopiaは、場違い、捉えどころのないさ、得体の知れなさを意味するギリシア語だが、否定の接頭語 a と、場所(topia)の組み合わせから、もともとは「あるべき場所がない＝正常ではない状態」を表わしている。アトピー性皮膚炎の「アトピー」も atopia に由来し、捉えどころのない病気という意味がある。

「故郷喪失(displacement)」は、近代社会に広く見られる特徴である。故郷を捨てて都会を目指した近代人は、簡単に故郷に帰ることができず、また、捨てられた故郷もその間に大きく変質して、帰るべき場所ではなくなってしまう。近代社会は、徹底的な未来志向の社会であり、固定的な過去の社会関係を常に解体、再編し、変化を志向し続けてきた。

夢見る近代人は「ここ」から「あそこ」へ、今自分が於てある場所(ここ)を捨て、別の場所(あそこ)を探しに行く。近代の望郷詩人なら、ハーディであれ、石川啄木であれ、佐藤春夫であれ、それは「田舎から都会へ」であり、ロレンスなら「下流階級から中流階級へ」となるだろう。

トマス・ハーディの『帰郷』は、近代の絶頂期であるビクトリア朝時代の一八七八年に発表された小説で、都会を憧れてやまない女性ユウステーションと、都会生活に疲れて帰郷した男性クリム、というパラドキシカルな構成で書かれた物語である。ユウス

テーシアは、退役大佐の父親と田舎エグドンに暮らしている美しい娘だが、ワイルディーヴと秘密の関係にあり、村人の評判はよくなかった。そこにパリのダイヤモンド商人のクリムが帰郷する。二人は惹かれあい、クリムの母親の反対を押し切って結婚する。クリムは教育者として故郷に奉仕する決意を持つが、ユウステーシアはいつしか村を抜け出したいと思っている。その後、クリムの目が不自由になり、都会に出られないことが明らかになると、ユウステーシアはワイルディーヴとよりを戻す。それが、和解を望んでいた母親を死に追いやり、彼女もワイルディーヴとの駆け落ちに失敗し、二人とも溺死する。クリムの帰郷は、ユウステーシアやクリムの母親、ワイルディーヴたちの運命を変転させたが、クリム自身も、苦悩に満ちた人生を生き延びることになる。

このように『帰郷』は、決して故郷に帰ることが許されない近代人の悲劇的物語である。故郷エグドンは、「海変じ、野変じ、河変じ、村変じ、人変じても、ただエグドン・ヒース(荒野)は残ってきた」という「雄渾壮大にして万古不変で、畏怖感を与え、時間から隔絶された絶対者としての自然である。ハーディは、近代人をエグドンに帰郷させることで、一大悲劇を演出しようとした。「エグドン・ヒース」は、変化する近代人にとって接することも許されない場所である。

① 室生犀星の「ふるさとは遠きにありて思ふもの」(「小景異情・その二」)は有名な一節だが、これには続きがある。

ふるさとは遠きにありて思ふもの

そして悲しくうたふもの

よしや

うらぶれて異土の^{かたみ}乞食となるとても

帰るところにあるまじや

……

「帰るところにあるまじや」に表われているように、犀星にとってふるさとは、遠くから思うもので、決して帰るべき場所ではなかった。実際に犀星は、流行詩人になった後、ふるさと金沢にほとんど帰っていない。

近代人は故郷を捨てた後、瘦せ我慢してでも故郷に帰らない。故郷を否定し、退路を断って前進あるのみの姿勢を貫いた。^D近代人にとって、故郷はいつか「帰るべき場所」として位置づけられ、帰郷はリタイアを意味していた。故郷を捨てて都会を生きる近代人には、望郷の念が募るばかりになる。

現代人も、前進の姿勢はそれほど変わらないのかもしれない。しかし、現代人は失郷者として、それも若者世代であれば生まれながらの失郷者として、初めから帰ろうなどと発想しない。そもそも没場所性によって「帰るべき場所」を失っている。近代人が「帰郷」を否定したのは対照的に、^E現代人は「帰郷」を忘却している。たとえば、地方出身者の「Uターン」も、「帰る」のではなく、前向きな選択肢の一つとして出身地方に「行く」のであり、「帰る(帰郷)」という行為が忘却されている。

故郷忘却のなかで地域は、現代人が「帰るべき場所(故郷)」に適合する必然性を失う。こうして地域は、歴史に対する責任を免れる一方で、生き残りをかけて現代人が「野営する場所」、あるいは「不時着する場所」への^Aゲイゴウを進めていく。ここでは、社会資産を継承し、^I伝統習慣をボクシユする意味がなくなり、不変不動のエグドン・ヒースも必要ない。細分化して高度になっていく数多くの専門空間との接続と適応を怠らないことが最重視され、地域は、ウェブ空間と同様、高次のシミュラークル環境を志向する。しかしながら、「共通の空間」だけでも機能不全に陥る地域に、より高次の機能が備わるとは考えにくく、地域はますます置き去りにされる。

人は生まれ育った地域(土地)で言葉を覚え、食べ方や挨拶などの作法を身につけ、自我を形成し、行動様式や世界との対峙方法を獲得する。たとえその土地を発った後も、それは本人に息づき、迷いが生じたらそこに遡って自分を確認しようとする。故郷は自らのルーツであり、生涯にわたる心の拠り所として、何かあつたら「帰るべき場所」になる。

ジョージ・オーウェルは、『1984年』でディストピア(絶望郷)を描いたが、実生活では故郷に対する思いはひとしおであった。オーウェルは、^B故郷に対する愛着心を、「自分では世界中でいちばんよいものだとは信じるが他人にまで押しつけようとは

思わない、特定の地域と特定の生活様式に対する献身」と述べている。パトリオティズムとは、一言でいえば「場所への愛」、生まれ育った場所への愛である。それは、場所の働きで束ねられた親密で慕わしく感じられる人々へのフエンの愛であり、それゆえパトリオティズムは甘美で、過剰な愛情や献身を生みやすく、ときにナシヨナリズムに利用されてきた。

しかし、現在の故郷は、生まれ育った地域にはない。そこから離れて、あくまでその人の記憶として辛うじて残っている。故郷とは、母の顔、食卓、通学路、友だちの家、小学校の校庭、空の色、水の匂い、言葉、繰り返し見た夢など「内面に宿る情景」であり、生まれ育ったモラトリアム期の身体化された記憶が、故郷の実体である。

このように故郷は、地域(場所)から遊離し、記憶(時間)で構成されている。故郷は、本来着地すべき現実の場所を失い、しかしなく記憶のなかを彷徨っている。前近代社会では時間で天体の位置を知るように、「いつはどこ」と深く関連づけられ、また、記憶が必ず場所に関連づけられていたように、時間と空間は渾然一体としていた。故郷も、個人の記憶にだけでなく、地域という現実空間のなかに見いだすことができたが、今や故郷は記憶だけの存在となっている。

(丸田一『場所論』による)

設問

- 一 傍線部アくオの、漢字をひらがなに、カタカナを漢字に直しなさい。
- 二 傍線部①「室生犀星」の作品ではないものを以下のaくdの中から一つ選び、記号で答えなさい。

a 『杏つ子』	b 『性に目覚める頃』	c 『青猫』	d 『抒情小曲集』
---------	-------------	--------	-----------
- 三 傍線部A「消費空間は、加工食品から白物家電までどのような商品でも、最前線にあるスーパーの売場のバックヤードで世界に大きく張り出している」とは、具体的にどのような状態を言うのか。簡潔に説明しなさい。
- 四 傍線部B「漠然とした不安」とは、具体的にはどのようなことに関する不安か。「くということ」につながるように本文中から十八字で抜き出しなさい。

五 傍線部C「故郷」とは、本来、人間にとっていかなる場所のことを言うのか。その定義として最もふさわしい部分を、「く場所」につながるように、本文中から四十五字以上五十字以内（句読点を含む）で抜き出し、その最初と最後の五字を書きなさい。

六 傍線部D「近代人にとって、故郷はいつか「帰るべき場所」として位置づけられ、帰郷はリタイアを意味していた」とあるが、このことを言い換えると、次のようなことになると思われる。

ただし、

X

には「立」の字から始まる四字熟語、

Y

には漢字一字が入る。

X

、

Y

に入る語を考えて書きなさい。

〈故郷を離れた近代人が夢見たのは、 X を果たし、故郷に Y を飾ることだったが、多くの人にとってそれはあくまで夢でしかなかった。〉

七 傍線部E「現代人は「帰郷」を忘却している」とあるが、「「帰郷」を忘却している」とはどのようなことを言うのか、わかりやすく説明しなさい。

八 傍線部F「故郷は、本来着地すべき現実の場所を失い、しかたなく記憶のなかを彷徨っている」とあるが、これは現代人にとっての「故郷」がいかなるものとしてあることを言うのか。「混在郷」という言葉を必ず用いて説明しなさい。

第二問 次の文章は、鉢かづきが継母によつて家から追い出された場面である。これを読んで、後の設問に答えなさい。

さていたはしや、鉢かづきを引き寄せて、召したるものを剥ぎ取りて、あさましげなる帷子ひとつ着せ参らせ、ある野の中の四辻へ、捨てられけるこそあはれなれ。さてこはいかなるうき世ぞと闇に迷ふ心地して、いづくへ行くべきやうもなし、泣くよりほかのことはなし。ややしばしありて、かくなん^a、

野の末の道踏み分けていづくともさして行きなん身とは思はず

とうちながめ、足にまかせて迷ひ歩き給ひけるに、大きなる川のはたへうち着き給ふ。ここに立ちどまりて、いづくをさして行くともなく迷ひ歩かんより、この河の水屑となり、母上のおはしますところへ参りなんとおぼしめして、河のはたへのぞき給へば、さすが幼き心のはかなさは、岸うつ波も恐ろしや、瀬々の白波激しくて、そこはかとなき水の面すさまじければ、いかがあると思へども、これを心の種として、すでに思ひきり、河へ身をこそ投げんとし給ふとき、かくこそ一首つらねけり。

② 河岸の柳の糸の一筋に思ひきる身を神も助けよ

かやうにうちながめ、御身を投げ沈みけれども、鉢にひかれて御顔ばかりさし出でて流れける程に、漁する舟の通りけるが、^③「ここに鉢の流れける、何ものぞ」と言ひて上げ見れば、頭は鉢にて、下は人なり。舟人これを見て、「あらおもしろや、いかなるものやらん」とて、河の岸へ投げ上ぐる。ややしばらくありて、起き直りつくづくと案じ、かくばかり、

④ 河波の底にこの身のとまれかしなごふたびは浮き上がりけん

などとうちながめ、^⑤あるにあらぬ風情して、たどりかねてぞ立ち給ふ。さてあるべきにあらざれば、足にまかせて行く程に、ある人里に出で給ふ。里人これを見て、「これはいかなるものやらん。頭は鉢、下は人なり。いかなる山の奥よりか、久しき鉢が変化して、鉢かづいて化けけるぞ。」^⑥いかさま人間にてはなし」とて、指をさして恐ろしがりて笑ひける。ある人申しけるやうは、「たとへ化物にてもあれ、手足のはづれの美しさよ」と、とりどりにこそ申しける。

(『鉢かづき』による)

(注) ○手足のはづれ——手足の指先。

設問

- 一 二重傍線部 a↘d の「ん」のうち、文法的に異なっているものを一つ選び、記号で答えなさい。
- 二 波線部ア「あさましげなる」、イ「そこはかとなき」を現代語訳しなさい。
- 三 傍線部①「いづくをさして行くともなく迷ひ歩かんより、この河の水層となり、母上のおはしますところへ参りなんと
は、どういうことを言っているのか、わかりやすく説明しなさい。
- 四 傍線部②の和歌「河岸の柳の糸の一筋に思ひきる身を神も助けよ」を、「一筋に思ひきる」という表現に注意しつつ、現代語訳しなさい。
- 五 傍線部③「鉢にひかれて御顔ばかりさし出でて流れける」ことは、どういう状態を言うのか、わかりやすく説明しなさい。
- 六 傍線部④「などふたたびは浮き上がりけん」を現代語訳しなさい。
- 七 傍線部⑤「あるにあられぬ風情して、たどりかねてぞ立ち給ふ」を、鉢かづきの心情に言及しつつ、六十字以内(句読点を含む)で説明しなさい。
- 八 傍線部⑥「いかさま人間にてはなし」を現代語訳しなさい。

第三問 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい(設問の都合により送りがなを省略したところがある)。

成化中、嘉善知県林某、捶死一家十三人。鄆城侶鐘按浙、将窮治之。林厚賂鎮守中官李文、使文宴侶以緩其事。侶知之、預令優人為滑稽語、以拒之。因扮一官賞雪、作雪獅子、令藏陰処、以俟後賞。曰、「何処可藏。」一卒云、「山陰可乎。」曰、「不可。」卒又曰、「江陰可乎。」曰、「不可。」其官高声曰、「但藏在嘉善県可也。」卒云、「此地無陰。何以藏之。」官曰、「汝不見嘉善林知県打殺一家非死罪十三人、不償命。豈非有天無日頭処。」一座皆驚。文亦不敢啓齒。

(『堅瓠集』による)

(注)

- 成化―明代の年号。 ○嘉善知県―嘉善は浙江省にある県の名、知県は県の長官。
○捶死―むち打って死なせる。 ○鄆城―伯鐘の出身地。 ○按―巡視する。
○鎮守中官―地方を監督する役目の宦官。 ○優人―役者、芸人。 ○滑稽語―漫才。
○賞―観賞する。 ○償命―死をもってつぐなう。 ○日頭―太陽。 ○啓齒―口を開く。

設問

- 一 傍線部Aを平易な現代語に訳しなさい。
- 二 傍線部Bをひらがなだけの書き下し文にしなさい(現代かなづかいでよい)。
- 三 二重傍線部について、「其官」がこのように言うのはなぜか、説明しなさい。